

令和八年度鹿屋体育大学入学式学長告辞

本日ここに、鹿屋体育大学体育学部二〇一名、大学院研究科二六名、合計二七七名の新入生を迎え、令和八年度の入学式を挙行できますことは、教職員ならびに在学生にとりまして、大きな喜びとするところであります。本日まで、ご子息、ご息女を温かく見守り、ご支援を惜しまれなかった、保護者の方々をはじめ、関係各位の皆様方に心からお祝い申し上げます。

鹿屋体育大学は、「スポーツで未来を拓く自分を創る」をスローガンに掲げ、他の体育・スポーツ・健康系の大学ではなし得ない、先進的な取組を数多く実施しています。

新入生の皆さんは、本日より鹿屋体育大学の学生として、新たな学びをスタートすることになります。そこで、専門とする競技種目あるいは専攻する課程に関係なく、皆さん全員が意識してほしい事があります。それはスポーツが持つ多面性についてです。

スポーツや武道の実践そのものは、身体的および生理的現象の表れであると同時に、その成績は、やる気、不安、緊張といった心の有りように左右される心理的現象でもあります。そしてスポーツや武道は、人間独自の営みとしての長い歴史を持ち、文化的、社会的側面も持ち合わせています。また、昨行われたスポーツ基本法の改正では、スポーツへの関わり方や価値を示すものとして、これまで謳われてきた「する」「みる」「ききえる」に「集まる」及び「つながる」といった社会的側面に関する言葉が追加されました。

そのような多様な特性を持つスポーツや武道に対し、実践のみあるいは限られた授業科目や学問領域からのアプローチでは、それらの本質を理解することは困難です。例えば改正されたスポーツ基本法では、スポーツに関する科学的研究の領域は、従来の医学をはじめとする四領域に、新たに社会学、倫理学、教育学などの七領域を加えた一一領域に変更になりました。このような変更は、スポーツや武道を学ぶ者にとって、実践する能力に加え、自然科学から人文・社会科学までも含む幅広い知識の習得が求められていることを意味します。言い換えれば、領域横断的な幅広い学びを通してこそ、スポーツや武道を学ぶ者に対し社会は何を求めているのか、またスポーツや武道を学ぶ者が、社会的課題に対し如何に貢献することができるのかを理解する道が開けてくるといえます。そして、それらの理解こそが「スポ

ーツで未来を拓く」鍵であるといっても過言ではありません。

鹿屋体育大学は体育系単科大学であり、幅広く学ぶという点では総合大学に比べポテンシャルが低いと思われるかもしれませんが、しかし、本学は、教員組織として、スポーツ・武道実践科学系、スポーツ人文・応用社会科学系、スポーツ生命科学系の三つの系を構成することで、多様な視点からスポーツ、武道、体育、健康づくりなどに関する教育と研究の充実を図っています。また、本学では、スポーツイノベーション推進機構をはじめ、スポーツ情報センター、国際交流センターや海洋スポーツセンターを中心に、スポーツや武道に関する教育研究のイノベーション及び国際化を目的とした様々なプログラムを実施しています。さらにスポーツによる地域振興や研究成果の社会実装を目的に、鹿屋市を中心とする地域の方々とは多岐にわたる連携事業を展開しています。

すなわち、本学には、様々な視点からスポーツや武道を学ぶ機会が数多く存在するわけであり、その機会を活かすかどうかは君たち次第です。一つのこと集中することも良いですが、自身の未来に思いを馳せることも大切です。どうか、日々、幅広い視野とスポーツや武道の未来に対する強い好奇心を持って、貪欲に学んでいただきたい。そのような積極的な学びの姿勢は、「する」「だけ」ではなく、「みる」「ききえる」「集まる」「つながる」といった多様な視点に基づくスポーツや武道の理解を深め、必ずや皆さんを「スポーツで未来を拓く」人材への成長へと導くと同時に、大学卒業後あるいは大学院修了後の自身のキャリアにつながる「自分を創る」原動力となるでしょう。

皆さんがこれからの学生生活を送るうえで基盤となる、ここ大隅の地は自然が豊かであり、鹿屋市をはじめとする周辺地域の皆様は、学生諸君を温かく迎え、様々な形でご支援してください。是非、大隅の地を第二の故郷と思い頑張ってください。

最後になりましたが、本日、令和八年度入学式を挙行するにあたり、ご来賓の方々並びに保護者の皆様方のご列席を賜りましたことに厚く御礼申し上げます。新入生の皆さんへの告辞とします。

令和八年四月六日

国立大学法人 鹿屋体育大学長

金久 博昭